

## 初期近代イングランドにおける海獣表象

高橋実紗子

### 一、序

一六一七年二月、ある「ひどい嵐の日」、エセックス州ハリッジに「大いなる海の怪物 (*a Mighty Sea-monster*)」が打ちあげられた。

体長五六フィート、体高または奥行九から一〇フィート、体幅一四フィート、「中略」尾ひれは一六フィートの範囲におよび、下顎は長さ一二フィート。雄のようである。皮膚は黒々として革に似ており、肉の色と質は豚肉のようだ。眼球は巨大で動かず「中略」、頭頂部には開いた噴気孔がひとつある。(True Report 10)<sup>(1)</sup>

流れ着いた怪物は死後数日が経過した若い鯨だった。扉絵と挿絵にはおなじ版画が使用されている。だらりと

大口を開けた雄鯨は岸边に横たわり、小さく描かれたふたりの人物がこの奇妙な漂着物を指差して議論を交わしているようだ。終末論者とおぼしき著者は鯨の座礁を、疫病の大流行、火薬陰謀事件、各地の火災、不作といった一六〇〇年代の一連の悲劇と関連づけ、「この海の怪物が凶兆である」可能性を示唆した (*True Report II*)。



図(一) ハリッジの座礁鯨 (*True Report 11*)

天地創造の三日目に分けられた水と地はそれぞれ生物を産みだし、やがて陸には獣、空には鳥、海には魚という魚が満ちた (Genesis 1: 9-10, 20)<sup>(2)</sup>。それらが本来定められた場所に留まらず越境することは天地創造の秩序に反するものとも考えられる。水底ふかくに属するはずの鯨が上陸するとき、その現象になんらかの不穏な前兆を読みとる者がいたことは想像にかたくない。鯨はしばしばレヴィアタンとも重ねられた。一六七七年、エセックス州コルチェスター地方の川に迷いこんだ雌鯨を解説した小冊子『深淵からの奇妙な知らせ』(*Strange News from the Deep*, 1677) も鯨をレヴィアタンと呼び、多くの人々が雌鯨の出現に驚倒したことを伝える<sup>(3)</sup>。「大海原は鯨の帝国であり領土であるゆえ、もし大いなるレヴィアタンがみずからの広大な領域を出て放蕩に周遊し、河川に姿を見せるようなことがあれば、世界は驚嘆し、これを驚異とみなすだろう」(*Strange News from the Deep* 3)<sup>(4)</sup>。

こうした座礁鯨の例がしめすように、海獣の越境は人々を畏怖させたが、彼らはもとより陸海の境界が曖昧な場に現れる。とりわけ潮の満ち引きによって水と地の線引きがぼやける波打ち際や河口付近においては、多くの海獣が目撃された。大プリニウスの博物誌によれば、ティベリウス帝の時代には、潮の引いた島の砂浜に大小さまざまな「三百以上の海の怪物」が現れたが、これに加えて「陸獣と同様の」角と牙をもった「海の象と雄羊 (sea-Elephants and Rams)」、すなわちセイウチとシャチが打ちあげられていたという (Holland 236; Bostock and Riley 452n33)<sup>(5)</sup>。欽定訳聖書 (一六一一年) に収録されたカナンの地図にも、鯨もしくはレヴィアタンを思わせる生物が三頭、海岸線に沿うように描きこまれている。鋭い歯を覗かせた巨大生物は大きな眼であたりを見廻し、顔の上部にはふくらんだ鼻孔がならぶ。二頭はなにかを待ち構えるように水の上をすべり、一頭は帆船に体当たりをして水をうねらせ、転覆させようとしている。海獣が陸地に接近するにしろ、人間が大地から海へ繰りだすにしろ、

境界の交わりは双方に危険をもたらさう。

海獣の越境は、魚類と獣類を横断する特徴をもつ彼らの曖昧な身体そのものを反映している。一七世紀前期の〈動物〉とは、天地創造の物語がしめすように、陸の獣、空の鳥、および海の魚を指し(Shannon 10)、『海の子牛(sea-calf)』、『海の象(sea-elephant)』、『海の馬(sea-horse)』、『海の狼(sea-wolf)』などと呼ばれた水陸両生の生物は不確かな位置づけにあった。鯨、イルカ、シャチは、一八世紀にカール・フォン・リンネが哺乳類として再分類するまでは魚に分類されていたが、一般的な魚とは異なりえらがなく、子を産み、乳で育てることが知られていた(Holland 238)。

創世記の大洪水は分かれた陸海をふたび融合させ、生きとし生けるすべてを洗い流したとされるものの、海獣の身体はそもそもその影響を受けなかった。天から水がくだり、ノアはあらゆる生物のつがい装箱舟へと招き入れたが、降りやまぬ雨が大地を覆い尽くして一掃したのは地上の被造物であった(Genesis 7:21)。獣と人間のほか、鳥や蛇も含まれたが、海獣については言及がない。王立協会創設の一翼を担ったジョン・ウィルキンスは、フランスの数学者ヨハネス・ブテオに倣い、科学的根拠をもとに箱舟の寸法と動物の必要頭数を計算したが、その際、水陸両生のセイウチやアザラシなどの類装箱舟に乗せるべき動物からはずしている(Wilkins 165; Shannon 279)。

陸地と海のあいだをたゆたう海獣は初期近代の人々にとって何を意味したか。本稿は、博物誌を中心とする文献を手がかりに、とりわけ一七世紀イングランドにおける海獣類の特異性を論じる。イングランドは海に面した場所であるにもかかわらず、これまでの自然表象研究は大地とそこに住まう動植物を中心とし、海と海洋生物に

については看過されてきた (Brayton 176-77; Graham 352)<sup>(8)</sup>。理由のひとつとして、当時のイングランドにおける魚類一般への関心の低さが挙げられる。博物誌は陸獣や鳥類を中心とし、魚類はたびたび除外されていた。<sup>(9)</sup> 一六八六年にはようやくフランシス・ウィラビイの『魚類誌』(*De Historia Piscium*) が王立協会から出版されるも、売れ行きは芳しくなかった (Graham 352)。魚類をあつかう博物誌の数は限られていたが (Graham 352-3)、海獣類については陸獣の記述に織りこまれるかたちで情報が蓄積されていた。博物誌は、境界が交わらないかぎりめったに遭遇する機会のない海獣の姿を記録し、人々に提供したのである。

獣から鉱物にいたるまで世界のあらゆる自然物を対象とした博物誌は、聖書や古典をはじめとする出典をもとに、事物の名称、性質、物語、薬効など多様な言説を網羅的に読者に提供し、究極的には神が創造した世界を読み解く一助となると考えられた。英国国教会の牧師補エドワード・トプセルも『四足獣の歴史』(*The Historie of Four-footed Beastes*, 1607) において、聖書が頻繁にもちいる動物のたとえを列挙し、読解にあたって各動物の知識を備えておく重要性を唱えた。彼はバトロンの宛てた書簡式の献辞において、聖書の預言に言及される動物を例に挙げ、「明らかにされていることを理解せずに、<sup>(10)</sup> どうして秘められたものの意味を推測することができましようか」と問うている (Topseil, "Epistle," n. pag.)。一七世紀に流布した英語の博物誌には『四足獣の歴史』のほか、同著者の『蛇の歴史』(*The Historie of Serpens*, 1608)、フィレモン・ホランド訳による大プリニウスの『世界史』(*The Historie of the World*, 1601)、ウォルフガング・フランツィウスの『獣の歴史』(*The History of Brutes*, 1670) およびヨハネス・ヨンストンの『四足獣図説』(*A Description of the Nature of Four-footed Beastes*, 1678) などが挙げられる。陸海を満たした動物の名もほとんど言及されない、きわめて簡素な天地創造の物語にたいして、博物誌は膨大

な量の言説を蓄積した。創世記一章に具体名が明記された海の被造物は「大いなる鯨 (great whales)」のみであり、そのほかは「うぐめくあらゆる生きもの (every living creature that moveth)」と記される (Genesis 1: 21)。水の集まりが「海 (Seas)」と呼ばれた日、その空間に満ち満ちたのはいかなる生物で、どのような姿をして動いていたか。博物誌が提供する無尽蔵な知識の宝庫は、天地創造をめぐる物語を補完する機能を果たしたといえる (Shannon 36-37)。

## 二、魚のような獣、獣のような魚

未知なる海とその生物を理解するための方法のひとつとして、人々はあらゆる陸の動物には対をなす海の動物がいるとの原則を利用した。<sup>(1)</sup> トマス・ブラウンは『迷信論』 (*Pseudodoxia Epidemica*, 1646) においてこの原則を疑問視し、たとえば陸にはカキに相当する動物がみつからず、海にはハイエナやラクダの名を受けた魚がみあたらないと説いたが、一般的には陸海に同等の生物が存在していると考えられていた (Browne 169-70)。<sup>(13)</sup> 「海の子牛」や「海の象」といった海獣は水に棲む亜種として四足獣の博物誌に登場し、陸の動物相の一部を構成しているかのようにあつかわれる。海は陸地の奇妙な鏡となり、海獣をめぐる記述は陸獣に関する知識を補うものとして活用された。

海獣の多くは陸獣を基準として名づけられたが、こうした呼び名は比喻として機能し、海獣類の具体的な姿を読者に想像させるものであると同時に、その位置づけをより曖昧化するものでもあった。当時の通称には、陸獣

の名前に「海 (sea-)」を複合させたもののほかに、「魚 (-fish)」を加えたものがみられる。水中をおもな棲みかとする、ひれがあつて脚のない生物であれば魚 (fish) と呼ぶことができたため、たとえばマナティも「大きな魚 (a great fish)」と表現できた (‘Fish,’ def. 1a; Jonston, *History* 296)<sup>(14)</sup>。一般に知られていた通称を参照すると、両方の名前が同一の生物を意味する場合もあればまったくの異種を指す場合もあり、ひとつの陸獣が同時発生的に複数の海棲生物の比喩となりえたことがわかる。

こうして海獣類や魚類は陸獣を基準とした連想によつて名づけられ、体系化され、姿を見たことがなくとも外見や性質をある程度想像することが可能となったが、かえつて厳密にどの生物を指すのかは不明瞭になった。実際には鰭脚類が尾ひれをもつからといつて常に「魚」と呼ばれるわけではなく、名前だけではその生物がより魚に近い特性をもつのか、それともより獣に近い外見をしているのか、判断がつきにくい。ブラウンも「海の馬」と呼ばれたセイウチを例に挙げ、たとえ陸獣を基準に命名されていたとしても、「姿が完全に一致」するわけではなく、色合いや構造などなにかしらの類似点があるのみにとどまることを指摘している (Browne 169-70)。「雄羊魚 (ram-fish)」および「海の雄羊 (sea-ram)」はシャチを指し、目の上の白い模様が雄羊のねじれた角を想起させたことに由来する (Bostock and Riley 364n28, 433n33)。「犬魚 (dogfish)」はトラザメなどの小型のサメを指すことが多かったが、トプセルの『四足獣の歴史』では「水辺の犬 (water dog)」の異名をもつビーバーを指す (‘Dogfish,’ def. 1a; Topsell, *Four-footed* 171)。一方、「海の犬 (sea-dog)」は小型のサメやアザラシを意味した (‘Sea-dog,’ def. 1, 2)<sup>(15)</sup>。「海の雄豚 (sea-hog)」はネズミイルカの通称で、ヨンストンはカバの別称として紹介する (Jonston, *Description* 60)<sup>(16)</sup>。「雄豚魚 (hogfish)」はネズミイルカのほかにアフリカマナティを指し、トプセルは両方を

「頭じゅうに剛毛をもつ」カサゴの通称として使用する (“Sea-hog,” def. 1, 2; “Hogfish,” def. 1a, 1b, 2a; Topsell, *Se-pens* 137).<sup>(17)</sup>

当時の命名法によってもつとも曖昧化したのは、陸獣と魚を組み合わせたような外見をもつ鰭脚類であろう。

アザラシは前述のとおり「海の犬」もしくは「海の子牛」と呼ばれたが、これについてトプセルは、ジョン・キースの『イングランドの犬種』(*Of Englishe Dogges*, 1576)に倣って、アザラシを「海の犬や海の子牛と呼ぶから」といってイングランドの犬種の一覧や数に含みはしない」と述べている (Topsell, *Four-footed* 171).<sup>(18)</sup> アザラシが犬に例えられながら実際の犬とはかなり異なる動物であったことをあえて指摘しなければならぬのは、海獣を理解する際に、陸獣の比喩がある程度までしか機能しなかったためである。この「海の犬」の記述は、ほかの呼称として「アザラシ (Seale)」および「海の子牛肉 (Sea Veal)」も紹介している。複数の名称が並列されるのは定義が読み手によって異なる可能性があったためであり、海獣、とりわけ鰭脚類の名前自体がかなり流動的だったと推測できる。

獣のような顔をして魚のひれをもつ鰭脚類が魚であるのか獣であるのか、という疑問は、彼らが魚であるのか肉であるのか、という問題にも直結していた。前述の「海の子牛」、つまりアザラシも問題の渦中にあった。アザラシはきわめて海との親和性が高く、なめした皮すらも「海が波立って荒れれば〔毛が〕直立し、海が凪ぐと平らになる」ほどであるので (Jonston, *History* 300)、「海に所属する魚と考えられる一方、〔ほかの牛 (other cattail) のように乾いた陸地で子を産み〕、乳を与えるため (Holland 242)」、陸に属する獣にも似ている。尾ひれは水中で泳ぐにも、陸地で移動するにも適している (Holland 242)。当時の聖職者は、狩猟中に林などに逃げこまなかった



アザラシを海上で狩ることができれば、四旬節であっても食べることもできるという解決策を打ち出したが (Phipson 9)<sup>(19)</sup>、こうした抜け道は、アザラシが明確な分類をすりぬける、境界線の狭間にいる動物だったことを示唆している。



図(二) カワウソと「海の子牛」(Jonston, *Description*, n. pag.)

反対に、鯨やイルカは基本的に「魚」と判断される。預言者ヨナは海に投げこまれ、「主は大魚 (a great fish) にヨナを呑みこませた」(Jonah 1:17)と伝えられるが、この「大魚」はしばしば鯨と解釈された。フランツイウスも『獣の歴史』の序文において「ヨナ書〔を解釈する〕には鯨の性質に精通していなければならない。預言者はこの腹に呑みこまれている」と説明する (Franz 3)<sup>(20)</sup>。ヨンストンの『自然の驚異なるものの歴史』(A History of the Wonderful Things of Nature, 1657)においても鯨は「あらゆる魚 (all Fishes) のなかでもっとも大きく重要」だと述べられており (Jonston, History 290)、魚に分類されるのが通例だった。イルカもおなじように、「海の魚 (sea-fish) のうちのみならず、すべての生き物のなかでもっとも動きが速い」というように、魚と表現された (Hol-land 238)。

鯨はその大きさをゆえに、陸獣の名を受けた通称はなく、代わりにレヴィアタンと重なる通称「海の怪物 (sea-monster)」と固有名「鯨 (whale)」が広まった。「象が陸の怪物ベヒモスであるように、鯨は海の怪物レヴィアタンである」ならば (Strange News from Gravesend 1)<sup>(21)</sup>、鯨を「海の象」と呼んでもよいところであるが、その身体が象でも表現できないほどの巨体と捉えられたのだろう。「海の象」という呼び名はセイウチに与えられ、のちにゾウアザラシを意味するようになった (‘Sea-elephant’)<sup>(22)</sup>。

大魚と呼ばれた鯨だが、イルカと同様、呼吸方法や出産など一般的な魚とは一致しない面も確認されていた。

確かであるのは、バラナとよばれる鯨もイルカもえらをもたないことである。しかしながら、これらの魚は両方とも、バラナの場合は額から、イルカの場合は背中から肺臓までつながっているような導管とおし

て呼吸している。「中略」「イルカは」九ヶ月のあいだ子を宿し、たいていは夏、一〇月目に子を産む。二頭の子イルカを同時に産むこともある。彼らは鯨やバラナと同様、子に乳をふくませる。(Holland 238)

鯨は魚の姿をしているものの、毛皮に覆われている「海の子牛やアザラシ」とおなじように、完全な状態の子どもを産みおとす (Holland 242)。前述のとおり、こうした性質によって鯨類が魚類から完全に分離され、哺乳類に再分類されたのは一八世紀後半のことだった。鯨やイルカも、そのほかの海獣とおなじく、単一の分類にはおさまらない性質をもち、人々が想像する分類の境界線上をゆれ動いていたのである。

### 三、認識を揺るがす鯨

すでに述べたとおり、鯨を鯨たらしめる第一の特徴はその巨体である。エリザベス朝で親しまれたジョン・マブレットの『緑の森』(A Greene Forest, 1567)においても、鯨の「巨大さ、広大さについては述べる必要がない。旅人なら誰でも知っていることだ」と説明されている (Maplet 110)。<sup>(33)</sup>

人々はこの巨体の数値化によって鯨を把握しようとした。序論で紹介したような鯨との遭遇譚は一七世紀をつうじて流布し、小冊子のみならず博物誌にも収められた。そのたびに寸法が記録されている。たとえばヨンストンの『自然の驚異なるものの歴史』は、大ブリニウスによるインド洋の鯨の採寸、ユーフラテス川付近の島で発見された鯨の採寸、および一五七七年七月にアントワープ近くで捕らえられた雄鯨の外見的特徴と採寸を記録し

ている。

「アントワープの鯨は」黒みがかった青色をしていた。頭に穴があり、強い勢いで水を噴きあげる。体長は五八フィート、体高一六フィート、尾ひれは幅一四フィート。目から鼻の先までは一六フィートある。下顎は六フィートで両側に二五本の歯が並んでおり、歯のない上顎にはたくさん穴があるのみだが、かつては相当な数が生えていたのだろう。(Jonston, *History*, 290-91)

しかしながら、数値化してなお、人々は茫漠たる海をおもわせる鯨の巨大さに圧倒された。大プリニウスは「インド洋で育つ魚はきわめて数が多く大きい。なかでもバラナと呼ばれる鯨やワールプール(Whalepoles)は、体長は陸地の四エーカーにもなる」と説明する(Holland 235)。渦という呼び名がしめすように、水を吹きだし大波をたてる鯨の身体は海とひとつづきになっているかのように捉えられた。鯨が真夏に目撃される理由は「山や岬から猛烈な勢いでやってくるつむじ風、暴風、大風、荒れ狂う嵐が、海を底から揺さぶり、かき乱す」ためである。「大波がこうした怪物を深みから引きあげ、巻きあげて姿をあらわにする」(Holland 235)。鯨のうねる巨体はまるで海の一部が隆起したかのように想像されたのだろう。

鯨の身体はこうして海の一部とみなされたが、重要であるのは、それが同時に陸の一部とも捉えられた点である。人々が鯨の身体を海のうねりと同一視する一方で、これを島、つまり陸地とみたてる伝統もあった。スイスの書誌学者コンラート・ゲスナーの『動物誌』(*Historiae Animalium*, 1551-58)の版面には船員たちが錨を下ろし、



図(三) 島と見誤られる鯨 (Gesner 119)

鯨の背中に上陸して火をおこすようすが描かれる (Gesner 119)<sup>(24)</sup>。鯨が海に浮かぶ島として映るとき、その身体は水と大地を凌駕するもの、境界線そのものとなり、遭遇者はみずからが身をおく空間を疑うようになる。

鯨が例えられる空間は島にかぎらない。ここでは座礁鯨をめぐる小冊子における表現を参照したい。一六七七年コルチエスター地方に出現した鯨を報告する『深淵からの驚異』(*Wonders from the Deep*, 1677)は、島に加えて、城や船といった比喩をもちいて鯨の身体を説明する。「深い海のあらゆる驚異のなかでも、もつとも驚きを生む



図(四) 『鯨についての忠実なる驚嘆すべき物語』の扉絵に描かれた、預言者ヨナを呑みこむ鯨 (*True and Wonderfull*, n. pag.)

のは鯨である。浮かぶ城、自然の船、その身体の大いこと。何も知らない船員なら島と見紛うだろう」(Wonders 3)。<sup>(25)</sup>『鯨についての忠実なる驚嘆すべき物語』(A True and Wonderful Relation of a Whale, 1645) は一六四五年一月にフランスから帰航する商船が目撃した不可解な海のようにと、船員との戦いで弱って座礁した鯨を記録した小冊子で、死んだ鯨を廃屋に例えている。「翌朝、「雌鯨」は死んでおり、岸辺を覆い尽くすように横たわる、広大な廃址のようだった。この地の人々があらゆるところから大勢やってきて、これを見物した」(True and Wonderful 6)。<sup>(26)</sup>解体した腹のなかからはイングランド人およびアイルランド人数名の免罪符を運んでいたカトリック司祭の身体が発見され、鯨は彼に「水中の煉獄」を体験させた「死の部屋」(Chambers of death)と表現される(True and Wonderful 7)。<sup>(27)</sup>座礁の場に居あわせた人々が見ていたのは、巨大な場所であったのか、生物であったのか。視界を埋めつくす鯨の巨体は生けるものでありながら、視点によって変化する場所でもあり、遭遇した人間の空間の認識に影響を与えた。

#### 四、海辺の驚異なるもの

固有名の記されていないかったヨナの大魚が鯨と理解されたように、博物誌は分野横断的に蓄積された情報を以って聖書の描きだす世界を解釈し、ときに補完した。天地が創造され、陸海が分たれたとき、水のなかを満たした被造物は「魚」だけではなかった。博物誌は聖書が明確には言及しないアザシやイルカといった動物を列挙して性質を解説し、海の豊かさをしめした。<sup>(28)</sup>

陸と海をまたぐ両義的な性質をもつ動物は、読者の想像をかきたてたが、ときに一貫しない博物誌の記述は、水陸両生の動物の多義性をさらに強調した。これは陸獣を基準とした命名法が、数種類の生物に適用されたことに一因がある。たとえば「海の馬」は、セイウチ、タツノオトシゴ、さらに、海神ネプトウヌスの戦車をひく半



図(五) ワニを食す「海の馬」(Topsell, *Four-footed* 328)

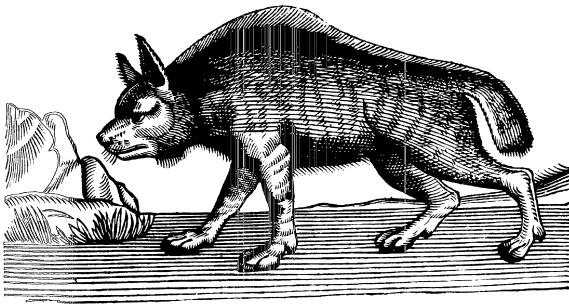


馬半魚のヒッポカムポスも指したが（‘Sea-horse,’ def. 1a, 2, 3a, 4）、博物誌ではおもにカバとして言及された。（Topsell, *Four-footed* 328; Jonston, *Description* 60）<sup>(29)</sup>。トプセルはカバを海獣としてあつかい、<sup>(30)</sup>「たいへん醜く不潔な獣で、鳴き声とたてがみが馬に似ているためにこう呼ばれるが、頭は雄牛や子牛に、残りは豚に似ている」と説明する（Topsell, *Four-footed* 328）。このような身体的類似から、カバは「ナイル川の馬（Horse of Nile）、海の雄牛（Sea-ox）、海の雄豚」とも呼ばれ、身体の「幅広さ、歯の白さおよび硬さ」からは、「海の象」とも呼ばれているという（Jonston, *Description* 60）。こうした複数の名前は、読者に同時にいくつもの異なる動物を想起させ、その重なりの中に、「海の馬」の身体を類推させる。

「海の狼」もまた、多義的に理解された水陸両生の動物である。アリストテレスによれば、アゾフ海の周辺には比較的気性のおだやかな魚食の狼が生息しており、漁師と魚を分けあっている（Aristotle, *History*, vol. 3, 309）<sup>(31)</sup>。ただし、漁師が獲物を分けられないようなことがあれば、「彼らは網を引き裂いてその裏切りと虚偽に報いる」（Topsell, *Four-footed* 748）。その特徴からこれをカワウソと解釈する見方もあるが、トプセルはゲスナーに従って狼ともカワウソとも異なる、背びれのような毛を生やした「海の狼」だと判断した（Topsell, *Four-footed* 748-49）。トプセルの説明では、「海の狼」は「海と陸の両方に生息する四足獣」で、おもに魚を主食とする（Topsell, *Four-footed* 749）。一方、ヨンストンによれば、その外見は「熊ほどの大きさで、皮膚がきわめて硬く、剣も容易には突き通せない。驚くほど大きな頭をもち、眼は非常に濃い毛の影になっている。鼻および歯は犬に似て、皮膚は鋭いあら毛に覆われて」おり、「たいへん肥えている」。硬質な皮は衣服として「着用される」こともあるという（Jonston, *Description* 72）。トプセルやヨンストンが提供する木版画には、尾ひれの無い、四足歩行の動物が描かれ、

海辺に生息する狼の一種のようにみえるが、ヨンストンの記述は、「海の狼」がアザラシ類の別名でもあることをどこか思い出させる。

博物誌の言説は、魚とも獣ともつかない海獣の姿や性質を読者に想像させ、驚嘆させたが、実際の身体はどうあつかわれていたか。一方では、蒐集家をよろこばせる珍奇な陳列物として、驚異の小部屋 (wonder cabinet) を



図(六) トプセルの「海の狼」(Topsell, *Foure-footed* 749)

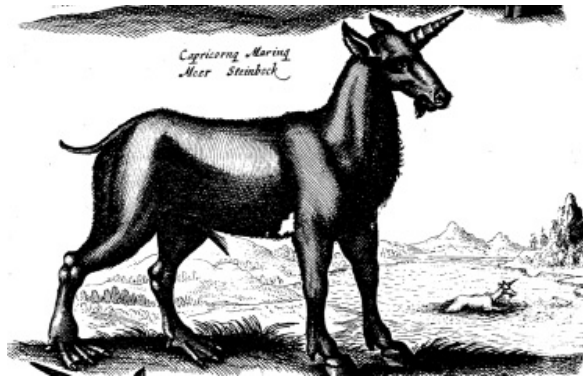
飾る品になった。たとえば一六〇〇年代初頭、ウォルター・コープ卿の小部屋には「サイの角」や「ミイラ」とならんで「海の馬の歯二本」や「イルカの尾」が陳列されていたとこう (Alick 9)。<sup>(32)</sup> 他方、海獣の身体は商業とも結びつく。海の危険を承知でみずから陸海の境界を越え、新世界を旅した商人や探検家は、海獣が脂肉油や生地として取引できる商品となることを知る。出現するたびに恐れられていた鯨も、燃料となる良質な油を提供す



図(七) ヨンストンの「海の狼」(Jonston, *Description*, n. pag.)

るものとして商業の文脈に組みこまれていった。

海獣を驚異として描写する博物学文化と、その商品化は、同時進行するものだった。すでに一五五四年には、モスクワ大公国に渡った商人ジョン・ハッセが現地におけるアザラシの商品価値を記録している。交易拠点だったコルモゴレイ（ホルモゴレイ）には、公国がオランダに売るための海塩や干し魚といった商品が集まっていた



図(八) 「海の山羊」、背景には海で泳ぐ姿 (Jonston, *Description*, n. pag.)

が、そのなかにはアザラシ由来の脂肉油もあった (Hakluyt, vol. 1, 257)<sup>(33)</sup>。その一方で、「海の子牛」、「海の狼」、それに一角獣のような角と水かきをもつ「海の山羊」などの姿を描いたヨンストンの『四足獣図説』は一六七八年に英訳されており、一七世紀後期にも、こうした動物の言説や木版画の需要があったことがうかがえる。海辺の奇妙な動物たちは、驚異なるもののまま、資源としての価値を見出されたのである。

船乗りや探検家は旅先の人々との交わりのなかで鰭脚類の有用性を知る。鰭脚類が一般化すると、その呼称も徐々に変化した。一例を挙げれば、博物誌において狼によく似た水陸両生の獣を指す「海の狼」という通称は、航海誌においてはアザラシ、アシカ、オットセイの類を指すものとして「アザラシ類 (seal)」という呼称と併記され、やがて後者の呼称が定着した ('Sea-wolf' def. 1, 3)<sup>(34)</sup>。新世界の人々と交流するなかで、「海の狼」たるアザラシ類は皮、肉、油として活用可能であることが明らかとなった。現ペルーの「イカの谷 (the valleys of Yca)」の人々は漁に出る際にアザラシの皮を身につけて膨らませ、浮具代わりにする (Grimeston 168)<sup>(35)</sup>。マーティン・フロビッシャーが「未知の土地 (Mela Incognita)」と呼んだバフィン島南端の半島付近では、アザラシ皮を身にまとうことで魚に気づかれることなく巧みに漁をする人々の知恵が明らかとなった (Hakluyt, vol. 3, 94)。ニューファンランドの海岸沿いに住む人々はアザラシ肉を食料とする。「きわめて味がよい」肉のみならず、脂肪も重宝される。住人たちは脂肪から「油をつくるが、完成したものは赤色をしており、われわれが葡萄酒や麦酒を飲むように食卓でこれをあおる」 (Hacker 134)<sup>(36)</sup>。フランス・ドレーク率いる一五七七年の航海では、船員たちが食料として「一般にはアザラシとよばれる海の狼」を数頭捕まえ、実際に食したこともあった (Hakluyt, vol. 3, 732)。

航海誌は博物誌の記述を補うように、新世界の動物の姿を記録し、海辺の動物をめぐる新しい情報を提供した。

商人たちにとってはそれがそのまま商品の一覧にもなったが、一般の読者には見知らぬ土地のようすを垣間見、世界のすみずみまで想像する手がかりとなった。一六八〇年代初頭、航海中にファン・フェルナデス諸島を訪れたウィリアム・ダンピアは、島じゅうがオットセイ（ファンフェルナデスオットセイ）で溢れていたと証言する。

オットセイ (Seals) はこの島に密集して群がっており、まるでこの世にはほかに棲む場所がないかのようだ。「中略」オットセイはよく知られた動物だが、彼らについて記して悪いことはないだろう。彼らは子牛ほどの大きさで、頭は犬と似ているため、オランダ人はこれを海のハウンド犬 (Sea-hounds) と呼ぶ。両肩の下からは長くて分厚いひれが生えている。「中略」海から上がってくると子どもを探して羊のように鳴く。自分の子どもに辿りつくまえにはほかの何百もの子どもの前をとおるが、どの子どもであっても乳をやるのを厭わない。子どもは子犬のようで、たいてい岸边に横たわっている。(Dampier 88-89)<sup>(17)</sup>

ダンピアが「よく知られた」と説明するように、一七世紀後半にもなると、鰭脚類は見慣れた動物となっていたが、ダンピアが興味深い動物として軽快に描写するように、その魅力が衰えていたわけではなかった。

ダンピアは、ファン・フェルナデス諸島のオタリアについても、博物誌を思わせる筆致で記録している。オックスフォード英語辞典によれば、ダンピアはオタリア類を「海の獅子 (sea-lion)」と記した最初のひとりである。一七世紀初頭に翻訳された『世界史』においてロブスターの一種を指したこの呼称は、耳介をもつ鰭脚類、

とりわけアシカ、トド、オタリアの類を指すものとして定着しはじめていた (Holland 452; “Sea-lion,” def. 1, 3a)。

海の獅子は体長一二から一四フィートの大きな動物で、身体のもっとも大きな部分は雄牛ほどにもなる。体型はオットセイ (Seal) に似ているが、六倍は大きい。頭は獅子に似ている。幅広い顔で、口唇のまわりには猫のように長い毛が多数生えている。ぎょろりとした巨大な眼をもち、歯は数インチの長さ、大きさは人の親指ほどである。「バーソロミュー・」シャープ船長の時代には、船員たちがこれでサイコロをつくった。オットセイのように身体に毛が生えているわけではなく、灰褐色をしており、どれもないへん肥えている。(Dampier 90)

島のオットセイは「濃い短毛のすぐれた毛皮」をもつ、「たいへん肥えた」動物のため、付近ではこれを捕獲して皮や油に加工する大型船がしばしば確認されたが、オタリアもまた脂肉油をつくるのにちようにどよい動物だった (Dampier 90)。一頭を煮ただけで、質がよく料理にうってつけの「大樽一杯分の油」が手に入るのだという。鯨もまた、豊かな資源であると同時に怪異な出沒者でありつづけた。北方航路を模索するフロビッシュヤーの五七八年の航海中には、船体が巨大な鯨に衝突し、一時は前にも後ろにも進めなくなった (Hakluyt, vol. 3, 77)。さらに、一五八〇年代におなじく北の海へ繰り出したジョン・デイヴィスらも、航海中、連日多数の鯨を見かけていた (Hakluyt, vol. 3, 99, 112, 114)。ニューファンドランドに上陸したハンフリー・ギルバートらは、島付近が鮭や鱈をはじめとする多種多様な魚類だけでなく鯨の宝庫でもあることを報告している。鯨は「プラセンティア湾

およびグランド湾で鯨油に加工され、大規模な取引がなされている」、有益な資源だった (Hakluyt, vol. 3, 123)。巨大な鯨の出現は、船乗りにとっては見慣れた光景になりつつあったが、神がなせる業ともみなされた。スペインのイエズス会士ホセ・デ・アコスタは、フロリダの先住民による鯨漁のようすに、「この世でもっとも獐狂で醜い獣に対峙する精励と勇気を与えまいし」創造主の全能をみた述べている (Grimestone 166)。イングランド国内では、座礁鯨や岸辺付近における鯨の出現は人々を震撼させ、一六九〇年代になっても小冊子が出版されていた。たとえば、一六九一年にも、カンバーランド (現カンブリア) のゴスフォースの港に巨大な「鯨か、もしくは鯨の姿をしたなにか奇妙で驚くべき海の怪物」が現れ、付近の住人を不安に陥れたのだという。冒頭で言及した小冊子と同様に、この出現は、同年に神がしめした複数の前兆 (*Strange Prodigious Signs*) のひとつとして紹介された (*5 Wonders*)<sup>(38)</sup>。

新世界の動物が肉、油、皮として利益をもたらす可能性が明らかになるにつれ、海獣類を管理可能な資源とみるイングランド人も増えたが、すでに述べたとおり、こうした見解はおもに商人や探検家に限られたと考えられる。海獣との遭遇譚が増加してなお、人々は境界線をまたぐ動物を見聞きし、想像するたび、驚嘆の念にうたれた。<sup>(39)</sup> 驚きを誘う鯨遭遇譚の小冊子は一七世紀をとおして出版されつづけ、また、魚とも獣ともつかず、名前すら定まらない奇怪な生物も博物誌に記録されつづけた。海獣は資源化によって急激に理解可能な動物に変化したわけではない。海獣は多くの人々にとって、肥沃で深奥なる海の姿を映す、謎を秘めた動物だった。



## 五、結

天地創造の日から、海は豊かな生命をうみだす場だった。ヨンストンの水がもつ豊かさをこう指摘する。「あらゆる海で育つ魚や生物の豊富さと多様さを考えるならば、水という要素の驚くべき肥沃さを認めざるをえないだろう。水は巨大な生き物を産みだす〔中略〕、しかもこれほどの数と種類をもつ」(Jonston, *History* 198)。

大海原はいかなる人間にも所有されず、法にも拘束されない空間だった (Brayton 180)。座礁鯨をめぐる小冊子『深淵からの奇妙な知らせ』に使用された、「鯨の帝国」という表現がしめすように (*Strange News from the Deep* 3)、海を占有するのはそこに創られた数多の動物であつた。所有権をもたない人間にとって、陸海の境界の向こうは危険が潜む場所である。海獣を資源として活用したいと考えた商人や探検家も、航海中はすべてを海にゆだねるほかなかった。海獣はこうした海という場に産みだされながら、陸獣をおもわせる性質をもち、陸海の境界線上を移動する。陸獣の奇妙な鏡であつた水陸両生の獣や、底知れぬ海から突如として出現する鯨は、人知を超えた海そのものを体現すると同時に、陸海の交わりを象徴する海の驚異でありつづけたのではないか。

本論では、おもに一七世紀イングランドの博物誌および周辺資料において、海獣類が複数の分類をまたぐ興味深い動物として表象され、人々の想像する被造界の全体像をより豊かなものにしたことを確認した。今後はこのような表象の説教における受容などを調査し、聖書の海の解釈におよぼした影響を検討したいと考えている。

- (1) *A True Report and Exact Description of a Mighty Sea-monster, or Whale, Cast upon Langar-shore over against Harwich in Essex. This Present Morneth of Februarie 1617.* London, 1617. EEBO.
- (2) *The Holy Bible.* London, 1611. EEBO.
- (3) 雌鯨は窮屈な川幅に四苦八苦しながらも上流に進んでしまい、もがいているうちに尾ひれを損傷して、あたりを血の海へと変貌させた。「そのわずかな部分から流れ出た血の洪水は川全体を血紅色に染めあげ、ある程度離れた海寄りの場所に住む者ですら変化に愕然としたほどだった」(Strange 5-6)。著者は鯨が誤って川に迷いこむ理由として、病気であるとする大ブリニウスの論を支持する。神の怒りのしるしであるこの憶測には否定的だが、巷でもっとも広まっていたのがこの説であることを認めている (Strange News from the Deep 7)。
- (4) *Strange News from the Deep.* London, 1677. EEBO.
- (5) Holland, Philemon, translator. *The Historie of the World.* By Pliny the Elder, London, 1601. EEBO; Bostock, John, and H. T. Riley, translators. *The Natural History of Pliny.* By Pliny the Elder, London, 1890.
- (6) Shannon, Laurie. *The Accommodated Animal: Cosmopolity in Shakespearean Locales.* The U of Chicago P, 2013.
- (7) Wilkins, John. *An Essay Towards a Real Character, and a Philosophical Language.* London, 1668.
- (8) Brayton, Dan. "Shakespeare and the Global Ocean." *Ecocritical Shakespeare*, edited by Lynne Bruckner and Dan Brayton, Routledge, 2011. pp. 173-90; Graham, Elspeth. "Ways of Being, Ways of Knowing: Fish, Fishing and Forms of Identity in Seventeenth-Century English Culture." *Animals and Early Modern Identity*, edited by Pia F. Cuneo, Ashgate, 2014. pp. 351-73.
- (9) 聖書に登場する数多の生き物をあつかったウォルフガング・フランツィウスの『聖なる動物誌』(*Historia Animalium Sacra*, 1612) は、一六七〇年にロンドンで初訳『獣の歴史』が出版されたが、題名から明らかであるように四足獣を収めた一巻しか訳されていない。同様に、エドワード・トプセルはコンラート・ゲスナーの『動物誌』に倣って『四足獣の歴史』および『蛇の歴史』を執筆したが、その後庇護を得ることができなくなり、鳥類の博物誌『空の鳥 (Fowles of Heaven)』を出版せず (Heltzel 199-200)。魚類の博物誌にいたっては着手する

- こともなかった。トプセルの死後出版された増強版の『四足獣および蛇の歴史』(*The History of Four-footed Beasts and Serpents*, 1658) にはトマス・マフセットの『昆虫の劇場』(*The Theater of Insects*) が加えられているが、魚類の博物誌が収められることはなかった。／Heltzel, Virgil B. "Some New Light on Edward Topsell." *Huntington Library Quarterly*, vol. 1, no. 2, Jan. 1938, pp. 199-202.
- (10) Topsell, Edward. *The Historie of Four-footed Beastes*. London, 1607. *EEBO*.
- (11) ライオンとイルカにまつわる次のような言説も、こうした原則を反映したものと考えられる。ライオンは「陸の動物 (beasts of the Earth)」を統治する王であり、イルカは「海の動物 (beasts of the Sea)」を支配する王とされた。ライオンは体調を崩すと猿 (ape) を食して回復すると信じられていたが、イルカは、その対となるものとして「海の猿 (Sea-ape)」を食べて体調を回復するのだという (Topsell, *Four-footed* 5; 482)。
- (12) フラウンは海にハイエナと呼ばれる動物がいないと指摘するが、ヨンストンもトプセルも、右ひれに触れると催眠や感覚麻痺などが起る「海のハイエナ (Sea-Hyenaes)」もしくは「ハイエナ魚 (fish Hyena)」に言及している (Jonston, *Description* 114; Topsell, *Four-footed* 435)°。大プリニウスおよびトプセルによれば「海の子牛」の右ひれも同じ作用をもち (Holland 242)°。
- (13) Browne, Thomas. *Pseudodoxia Epidemica: or, Enquiries into Very Many Received Tenents and Commonly Presumed Truths*. London, 1646. *EEBO*.
- (14) "Fish, N.1." *OED Online*, Oxford UP, 2020; Jonston, John. *An History of the Wonderful Things of Nature*. Translated by John Rowland, London, 1657. *EEBO*.
- (15) "Dogfish, N." *OED Online*, Oxford UP, 2020; "Sea-dog, N." *OED*, Oxford UP, 2020.
- (16) Jonston, John. *A Description of the Nature of Four-footed Beasts*. Translated by J. P., London, 1678. *EEBO*.
- (17) "Sea-hog, N." *OED Online*, Oxford UP, 2020; "Hogfish, N." *OED*, Oxford UP, 2020; Topsell, Edward. *The Historie of Serpents*. London, 1608. *EEBO*.
- (18) 『四足獣の歴史』における犬の章は、大部分がエイブラハム・フレミング訳の『イングランドの犬種』からの引用から成り、当該箇所もその一部である。／Caius, John. *Of Englishe Dogges*. Translated by Abraham Fleming. Lon-

don, 1576. EEBO.

- (19) Phipson, Emma. *The Animal-Love of Shakespeare's Time: Including Quadrupeds, Birds, Reptiles, Fish and Insects*. Cambridge UP, 1883.
- (20) Franz, Wolfgang. *The History of Brutes; or, A Description of Living Creatures*. Translated by N. W., London, 1670. EEBO.
- (21) *Strange News from Gravesend and Greenwich*. London, 1680. EEBO.
- (22) "Sea-elephant, N." *OED Online*, Oxford UP, 2020.
- (23) Maplet, John. *A Greene Forest, or A Naturall Historie*. London, 1567. EEBO.
- (24) Gesner, Conrad. *Historie Animalium*. Vol. 4, Zürich, 1558. Biodiversity Heritage Library.
- (25) *Wonders from the Deep*. London, 1677. EEBO.
- (26) *A True and Wonderful Relation of a Whale*. London, 1645. EEBO.
- (27) 人間にたいしては恐怖や驚嘆をもたらす鯨の身体だが、子鯨にとっては保護を提供する避難所である。「[子鯨]を危険に追いやる最大の脅威は、海の嵐、しけである。こうした状況では、雌鯨は以下のようなわざをもちいる。雌鯨は身体をしならせて子らを円形に囲み、家の広間 (Parlor house) に入れるかのように安全にかくまう。一時的に子を吞みこみ、腹に入れて守るとも言われている」(Maplet 110)。
- (28) 哀歌四章が「海の子牛」つまりアザラシに言及していると考えるもある。ジュネーヴ聖書で「ドラゴンですら乳を与えて子を養う」と訳されていた箇所は、欽定訳聖書では「海の怪物ですら乳を与えて子を養う」という訳に変更されている (Lamentation 4:3)。トプセルはこれに言及し、この海の怪物を「海の子牛」とみなすひともいると説明するが、自身はドラゴンでもアザラシでもなく、特徴的な乳房をもつ怪物ラミアを指しているとの解釈を支持する (Topsell, *Four-footed* 454-55)。<sup>9</sup> *The Geneva Bible: A Facsimile of the 1560 Edition*. Edited by Lloyd E. Berry, Hendrickson Publishers, 2007.
- (29) "Sea-horse, N." *OED Online*, Oxford UP, 2020.
- (30) トプセルはカバの足が「泳ぐよりも歩くのに適しているように見える」ため、これを『四足獣の歴史』に収録したが、カバのより詳しい記述については「魚の歴史 (the History of Fishes)」で説明することにしたと述べて

- おり、カバが魚類誌で紹介されるべき海獣だと考えていたことがわかる (Topsell, *Faune-footed* 328)。
- (31) Aristotle. *History of Animals*. Translated by D. M. Balme, vol. 3, Harvard UP, 1991. The Loeb Classical Library.
- (32) Aitick, Richard Daniel. *The Shows of London*. Harvard UP, 1978.
- (33) Hakluyt, Richard. *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques and Discoveries of the English Nation, Made by Sea or Over-Land, to the Remote and Farthest Distant Quarters of the Earth*. London, 1598-1600. 3 vols. *EEBO*.
- (34) “Sea-wolf, N.” *OED Online*, Oxford UP, 2020.
- (35) Grimeston, Edward, translator. *The Naturall and Morall Historie of the East and West Indies*. By José de Acosta. London, 1604. *EEBO*.
- (36) Hacket, Thomas, translator. *The New Found Worlde, or Antiarctike*. By André Thevet, London, [1568]. *EEBO*.
- (37) Dampier, William. *A New Voyage Round the World*. London, [1697-1703]. *EEBO*.
- (38) *5 Wonders in the Month of July 1691: A Faithful Narrative of the Several Strange Prodigious Signs, and Wonderful Appearances & Accidents, Which Have Lately Happened in Several Parts of England, Both from the Heavens, Earth, and Water*. London, 1691. *EEBO*.
- (39) 陸海の境界にかぎらず、境界を越える生物たちは人々に被造界の不思議を感じさせた。ほかの例を挙げれば、インド洋やカリブ海を進む商船が目撃したトビウオ (flying fish) の群れもまた、空と海の境界にとらわれない驚異であった (Graham 160-61)。